

## 答 辞



第六十七期卒業生代表

## 酒井 聡 史

北国の長く厳しい冬も終わりに近づき、新しい春の兆しが見え始めています。

本日は、私たち卒業生のためにこのような素晴らしい卒業式を行っていただき、本当にありがとうございます。お忙しい中、お集まりいただいたご来賓の方々や保護者の皆様、今日のために準備をしていただいた先生方や職員の方々、在校生の皆さんに、卒業生を代表して心よりお礼申し上げます。

校訓「寛容」「進取」「良識」のもと、北高で過ごした3年間の高校生活は、大変刺激的なものでした。主体性を重んじる自由な環境で、何事にも好きなだけ打ち込むことができた3年間でした。

知的好奇心をくすぐるような日々の授業の中で、わからないことがあれば詳しく知りたい、理解したいと思ひ、それがわかると喜びを感じ、もっと詳しく知りたいと思う、そういう姿勢が自然と身につきました。本来、学びとは、何かのための手段としてではなく、純粹に「知りたい」という欲求から生まれるものなのではないかと思ひます。そういう意味で、北高では学びの本質に触れることができたように思ひます。

学校生活を彩りあるものにしてくれた北高の行事の中でも、最も印象に残っているのは学校祭です。各部門で優勝を目指し、クラスの仲間とアイデアを出し合い、一ヶ月間準備をする中で、意見がぶつかりあうことはたびたびありました。また行灯などは良い作品を作ろうとこだわるあまり、当初の計画から大きくずれ込み、学校祭当日までに間に合うのかと不安を抱えながらの作業でした。しかし、完成したときにはクラスが一つとなり、何とも言いがたい達成感を味わったこと、仲間と深い感慨に浸ったことは忘れられません。一つのことに対し、一人ひとりが自分の役割を果たしながら、集団としてまとまってやりとげることの大変さや素晴らしさを実感しました。

また、私は生徒会執行部に所属し、生徒会会計として予算の作成、管理を担当しました。数ヶ月にわたり予算作成のプランを決め、すべての部局代表者と予算折衝を行い、少しずつ予算を割り振っていきました。当然ながら全てがうまくいくわけではなく、折り合いがつかないこともしばしばあり、忍耐力が必要な仕事でした。しかし、この仕事を経験したことで、どんなに大きなものを前にしても、一つずつこなしていけば必ずやり遂げられるという自信を持つことができました。

さまざまな視点を受け入れる「寛容」、慣例にとらわれず、変化を恐れず、進んで新しいことに取り組む姿勢とする「進取」、自らを客観的に見つめ、どう行動すべきかを考える上での指針となる「良識」。北高での3年間は私に今後の人生における基盤をもたらしてくれたように思ひます。

さて、今日の社会に目を向けてみると、世界全体が「寛容」ではなく「不寛容」な社会へと向かっているように思われます。アメリカでは昨年11月にトランプ氏が大統領選に勝利し、アメリカ第一主義の政策を掲げています。中東・アフリカ7カ国からの入国を一時禁止する大統領令は世界的に大きな議論を巻き起こしました。ヨーロッパではイギリスがEUを離脱し、その他の国々でも極右の勢力が増しつつあります。世界各地で続くテロの恐怖も収まる気配がありません。このような現代社会の中で生きる私たちには何が求められているのでしょうか。このような時代においては「寛容」な態度はもはやきれいなことではないのでしょうか。

私はそうは思いません。世界のグローバル化はもはや止められず、境界線を引いて他者を排除することは不可能です。インターネットはいまや全世界に個人のレベルでつながっています。私たちがすべきことは、今こそ「寛容」の精神で、異なる価値観を受け入れ、異なる価値観を持つ他者と対話することではないでしょうか。

私たちにはこれからの社会を担い、そして次の世代へと引き渡す責任があります。しかし、そう言うものの、自分に何かできるのか、私が何かしたところで世界にはなんら影響を及ぼすことはないのではないかと不安に思うこともあります。しかし、私一人の力は小さくとも、同じように「対話」をしようとする人々が百人、千人になれば社会を動かす大きな力になるのではないのでしょうか。18世紀のフランス革命は多くの民衆によってなされた革命でした。まさに個々の力が合わさり、社会を変えた典型でしょう。現代の私たちは、知性によって、それよりももっとスマートに、穏やかに、世界を変えていくことができるはずだと思ひています。誇り高く「寛容」に、「進取」の精神をもって世界に関わっていくことが私たちにはできると思ひます。

私たち313名はこの式をもって札幌北高校を卒業します。劇作家であるバーナード・ショーは「人生とは自分を見つめることではない。人生とは自分を創ることである。」と述べました。私たちの人生はまだ始まったばかりです。大人に守られてきた世界を出て、未知の領域に足を踏み出すことは怖さもありますが、誰にも決められていない人生を、自分自身で決めていくことに、今は大きな希望と喜びを感じています。不可能とか無謀だと思われれることにも挑戦できるのは若者の特権だと思ひます。既存の枠にとらわれず、自由な発想で多くのことに挑戦し、私たちがそれぞれ持つ翼をめいっばいに広げ、世界に大きく羽ばたいていきたいと思ひます。

今日まで私たちを支えてくださった先生方や職員の方々、保護者の皆様、在校生の皆さんに心から感謝の言葉を申し上げます。私たちはこの「北高」で大きく成長することができました。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、この札幌北高校がいつまでも生徒の人間の成長を育み、社会に輝く存在であることを祈って、答辞とさせていただきます。

平成二十九年三月一日